

◆座談会

# 青山学院の理念にもとづく

## グローバル化を全学あげて推進

松澤 建 理事長／杉村 佐壽 常務理事

大学国際交流センター 岩田 伸人所長／井田 昌之副所長／増永 良文副所長



「理事長声明」のもとで取り組む中核をなすのがグローバル化の推進である。米国のメソジスト監督教会から派遣された宣教師によって創立された青山学院の国際化は、すでに136年前から始まっているといえる。

近年、青山学院の国際交流が積極的に推進され、ベトナム、モンゴルを訪問、また、外国からの要人訪問、協定締結やアジアを拠点にサテライトオフィスやリエゾンオフィスの開設などが相次いでいる。

このたび、松澤理事長、杉村常務理事、4月より就任された、大学国際交流センター 岩田所長、井田副所長、増永副所長による座談会が行なわれた。

青山学院の理念に基づけばグローバル化の推進は必然的であり、そのことを念頭に、青山学院の全教職員が取り組めば、スピード感をもってグローバル化が推進でき、さらに、海外で活躍する校友の協力も不可欠であると、熱い意見が取り交わされた。

〔AGU NEWS 51号〕に、伊藤大学長、土山副学長によるグローバル化の対談を掲載

## 全教職員による取り組みが 国際交流を推進

杉村 今回はグローバル化推進の現状を伺うために、松澤建理事長と今年4月から就任された国際交流センター岩田伸人所長、井田昌之副所長、増永良文副所長にご出席いただきました。はじめに、先生方の抱負をお聞かせください。

岩田 私は、今までWTO研究センター所長として7年ほど携わってきましたが、その間、国際交流と似たようなことをやってきました。この経験を生かして「グローバル化をどうするか」ということが求められて就任したのだと思っております。

本学の留学生受け入れの現状は、全国平均は大学定員の3%です。すから、本来なら本学に600名の留学生が在籍していてもおかしくないのですが、実際には、まだ約300名です。絶対的に留学生が少ないというのが本学の現状です。

そこで、留学生が常時3,000人とか4,000人在籍している状況を目指すのは無理としても、少なくとも、4年後には常時、約1,000人の留学生が在籍するということを念頭におい

て、大学執行部や先生方にご相談しながら、国際交流センターとして出来ること、またやるべきことを進めていこうと思います。

井田 副所長に就任した際、依頼された項目が3つあります。

まず1つ目は、青山キャンパスの中で、留学生業務関連です。そういうことについて勉強しながらお手伝いさせていただきます。

2つ目は、自発的に本学を希望してくれる私費留学生を増やすことです。他大学ではある程度来ているけれど、本学にはあまり留学生が来ていない。そういうことを重点的にとりあげる対象国があればアプローチを強化する。3つ目は、国内での強化として、「東京にある青山学院が留学生を受け入れている」という認知度を上げることからスタートしなければならぬと思います。

増永 全学部の1・2年生が過半数（総合文化政策学部だけは1年生）相模原キャンパスの副所長として、日本人学生の海外志向の意識高揚に努めるほか、現在数は少ないですが、本学に入学してきた留学生のケアに努めたいと思います。しかし、2012年度からは、相模原キャンパスは理工学部と社

会情報学部だけになります。2013年度以降に新設学部が創設されるとしても、大事なことは、青山キャンパスとは異なる相模原キャンパス独自の魅力をいかに出すかだと思えます。その切り札がグローバル化だと考えています。

杉村 青山学院は、174項目の課題に代表される改革・改善に取り組んでいる最中ですが、改革の非常に重要な部分をなす国際交流において、理事長は現状をどう捉え、新しい取り組みにどのように期待されていますか。

松澤 今日発行の日本経済新聞（5月17日付）にベトナムから3,000人の留学生が来ているということが掲載されました。しかし、本学にはベトナムからの留学生が来いていないのです。いかに本学が留学生の受け入れや国際交流に立ち遅れているかということを示しているのではないのでしょうか。

これもよく報道されていることですが、日本には13万人の留学生がいるといわれています。高校生や専門学校生の留学生もいますから、仮に大学生を10万人としても、本学にはそのうちの300人ほどしか在籍していないのが現状です。もちろん、ただ留学生を数多く

受け入れれば良いということではありませんが、時代の要請や時代の流れにはそれなりに対応、適応していかなければなりません。

そのためには、一部の担当の方々だけで国際交流を促進しようとするのではなく、大学が中心となつて、教職員全員がしっかりと意識を持っていかなければいけない。それが私が一番大事なことではないかと思えます。

杉村 そういう意味では岩田先生が話されたように、まず第一目標として、本学の大学生のうち、およそ5%程度の1,000人は、留学生が占めるということを目標に、ぜひとも全学を挙げて協力体制を組んでいただくようお願いしたいと思えます。

ところで、今日はたまたまベトナムのカップ前大使と意見交換や懇談をする機会を得ましたが、このところベトナム、モンゴルやカザフスタンなど各国の教育関係者、企業関係者が本学を訪問され、以前に比べれば随分と交流が盛んになってきました。こういった動きはもちろん大歓迎ですが、理事長はこのような国の留学生の受け入れをどのように捉えていますか。

松澤 本学の現時点でのキャンパス



いわた のぶと  
岩田 伸太郎 所長  
国際交流センター  
〔経営学部教授〕

テイ：意欲、意識改革や物理的な意味でのキャパシティも含めて、そこにはおのずと優先順位をつけないといけないと思います。欧米、中国、韓国はもとより、ベトナム、モンゴル、カザフスタン、サウジアラビア、イラン、中近東、ウラル・アルタイゾーンの国々にも本学をもっと周知していきたいと思っています。しかしそのためには、

本学だけでは限りがあります。例えば30年の歴史があるFEC（民間外交推進協会）などと一緒に、大事なネットワークや人脈などを活用させていただきながら、ある程度のスピード感を持ってやっていかないと、少なくとも10年は遅れている本学の国際交流が促進できないのではないかと考えています。そして、教職員が皆でこれから努力して、全力を挙げてやっていけば、十分に追いつけると

思います。

### 国外拠点は校友の協力が大切

杉村 青山学院を国外に知っていただくために、昨年ぐらいいからようやく台湾、韓国、バンコクにサテライトオフィスやリエゾンオフィスを設置するということが実現してきました。それぞれのオフィスで、今後はどういうことを念頭に置いて活動していく予定ですか。

岩田 これについては、増永副所長、井田副所長とも協議を重ねていますが、まずはリエゾンオフィスを地域の拠点として、そこから周辺に、例えば留学生の獲得ですとか、現地での広報活動などを進めることになるかと思っています。現状では台湾の淡江大学にサテライトオフィス、リエゾンオフィスとして、韓国の慶南大学、上海の上海師範大学、タイのタマサート大学に開設し、今後はモンゴルに2箇所、ドイツに1箇所を開設する予定です。リエゾ



いわた まさゆき  
井田 昌之 副所長  
国際交流センター  
〔国際マネジメント研究科教授〕

ンオフィスの数を地域ごとにもっと拡充する必要があると思います。ただし、先ほど理事長が話された「早急にやるのが不可欠」な場合と、逆に、「早急にやると質が確保できにくくなる」場合とがあります。とりあえずは多少のリスクを覚悟しても少し広げてみて、それぞれ修復しながら質を高めていくというやり方をとったほうがいいのではと思っています。今まであまりにも慎重すぎたというのが反省点として挙げられるのではないかと思います。

井田 非常に難しい問題に直面することになったというのが正直な印象です。継続的な活動ができる形で用意する、しかもそれを多数置く、ということになりますと、複数箇所において、リエゾンオフィスを成功させるためには、たくさんの方々のご協力が必要になります。しかも、遠隔の場所ですから、



ますなが よしふみ  
増永 良文 副所長  
国際交流センター  
〔社会情報学部教授〕

コミュニケーション一つとっても非常に困難になります。日ごろの教職員や学生たちの活動があつて、初めてリエゾンオフィスの意味は、さらに強化されると思います。どうやって人と人をつなぐかという要素を並行していくことが我々の一番大きな課題だろうと思います。

岩田 現地の校友会の支部のご協力を仰ぐことが大事かと思っています。校友の皆様は、私たちと志を一つにしたいだいているわけですから、長期的にも、質の面でもよい効果が得られるだろうと思います。増永 まったく同感です。海外のオフィスにそんなに頻繁に足を運べるわけでもないのに、その運営は現地の方に負うところが多だと思ふのですが、そのポイントは現地のスタッフの方がどれほど青山学院のことを思ってくれているかにかつきます。この思いで校友の



まつざわ けん 理事長  
松澤 建

方に勝る方は考えられない。加えて、海外の校友の「ネットワークづくり」が彼らの活動を助ける意味で、とても大事だと感じています。

**杉村** 青山学院はこれまで、学校同士の交換留学や先生方の学術交流などを行ってきました。

今後、それぞれの国の不特定多数の人たちに、青山学院をPRしているということに対して、理事長はどういう点で期待されていますか。

**松澤** すべての点で期待していません。優先順位をつけるにしても、例えば1〜20の順位は、なかなかつけられませんよね。4つぐらいのグループに分けて、各グループで何を優先するかを決めたほうがいいと思います。リエゾンオフィスの件もそうですが、いずれにしても受け入れる際の留学生の皆さんの基準作りも必要です。例えば財務的、経済的な受け入れ方法、

ドミトリーも含めてどういうふうにするかなど、しかるべきスタンダードを設けるべきだと思います。

過去は過去でどうすべきだったかということをしつかりと直視して、それをベースに今後どうするかを考えることが一番の勉強です。そういう意味では新しい今度の陣容にとっても期待していますし、法人執行部の私たちも一体となつてやりたい、また、やるべきであると思っています。

**岩田** 青山学院は、これまで競争相手を取って設けずにきて、「特別だ」という気持ちもあったと思います。グローバル化をするということは、かなりのエネルギーが必要ですが、いままでその機運が足りなかった。これをまず盛り上げなければ、いかに法人や大学執行部が頑張つても長続きしないでしょう。ですから、「グローバル化はすべての学部に通ずる問題であ

る」という認識を持って、学内の機運を盛り上げることをやり続けたいと思います。

**井田** 授業の中で、学生とグローバル化が大事だという話になって、いろいろな夢を語つたりしますが、いざ、実現手段を考えるとという段になると、「とりあえず国内のことと考えよう」という下地ができてしまっているように感じます。「国際があつて日本がある」という意識をいろいろなフィールドでお互い再確認する必要があります。

**増永** 私の所属する社会情報学部はまだ若い学部で、国際交流の実績に乏しい学部ですが、コミュニケーションのための英語には創設当初から重きを置いたカリキュラムを実施してきました。その甲斐あつてか、留学の相談に国際交流センターを訪れる学生も多いと聞いています。しかし、TOEICやTOEFLの点数が満たないと

いった現実的な問題に直面してしまっています。青山学院のグローバル化を語るならば、まずこのレベルの問題はクリアしておきたい。本学では「情報スキル」を全学生に課すことにより一定の情報リテラシーを担保していますが、今後グローバル化に向けて「外国語スキル」を全学的に設けることは一案かと思えます。

**学院の理念は、グローバル化**

**杉村** ここ数年、世間一般で「選択と集中」ということが言われています。本学に例えれば、限られた財源をいかに有効に使っていくかということを考えるときに、大業としてどういったものを取り上げていくか。大きな意味でいえば国際交流、青山学院のグローバル化は一つの大きな選択だと考えています。現時点では、その基本的な考え方が示されていないのではないかと思いますね。

これからの時代、18歳人口が減っていくわけですから、例えば教育提携を国内でどんどん拡充して優秀な生徒に来てもらうとか、あるいは海外の学校との協定や提携をして、いろいろなタイプの留学生を増やすことも大事だとか、そういう基本方針が必要だと思えます。機運を盛り上げて、そして全員が協力して実現していく。そうすれば、国際法に非常に強い先生、キリスト教系の学校に詳しい



すぎむら かし 常務理事  
杉村 佐壽 (国際交流担当)

いた現実的な問題に直面してしまっています。青山学院のグローバル化を語るならば、まずこのレベルの問題はクリアしておきたい。本学では「情報

先生など、先生方のこれまでの蓄積というか資産を活用できるというところにもつながっていきます。

**岩田** まず、本学が「なぜグローバル化をしなければならぬか」ということを明確にすることが必要だと思えます。これは単純明快で、青山学院の理念に基づけばグローバル化を進めることは必然的なことです。そのことを先生方や校友の方々に認識してもらわなければならぬと思えます。

そして、これからの世の中は日本社会の伝統的なグループ・オリエンテッドな生き方ではなく、個人対個人による交渉やコミュニケーションを通じて相手を説得したり、あるいは自分のアイデアを相手に認めてもらわねばならない状況に直面することが急速に増えてくると推察されます。そのような来るべき世界を見据えて、大学の教育カリキュラムにも工夫が必要であり、グローバル化もその一環と考えるべきではないでしょうか。

**コミニケーション**は上手でも、相手から確実に信頼を得るには、自分の信念や論理的思考でもって、相手に自分という存在を認めてもらわなければいけない。そのためには、個人が強くないとい

けない。個人が強くなるためにはどうしたらいいかということで、行きつくのは、一つは大学の「グローバル化」だと思えます。今までのような集団で何かを行うという伝統的な教育の仕方ではなく、そこから脱皮するためにグローバル化が必要だと思えます。

**井田** 岩田先生のおっしゃる通りだと思えますね。私の国際経験は、基本的にはIT関係中心で対米国だったわけです。次第にその中で「アジアにいる日本なんだ」ということに多数直面するようになり、自分自身の意識も活動も、だんだんと変わってきました。アジアにある日本の中に生まれた者として、ようやく少し目が開けたような気がしましたね。

**グローバル化**は、完全にニュートラルっていうことは絶対にはありえないわけです。しかし、目を開いてあちこち見てみることに、それに基づいて、その人が自分の確固たる考え方を持てるように努力することが大学教育機関でのグローバル対応の基本だと思えます。そして、教員がやっていると学生もやってみようと思うものです。これが大事ですね。

**増永** 青山学院のグローバル化を

考えるときに、他が行うようなことをやっていたのでは、遅れは解消できないし、先も見えてこないと思えます。青学は東大とも違うし、慶應とも違います。何が違うかといえ、建学の理念が違います。青山学院のスクールモットーは「地の塩、世の光」ですね。誰が地の塩となり世の光となるかと考えたとき、それは特権階級ではありません。青山学院が育てる善良なる市民です。キリスト教の精神にのっとり、世の中に貢献し、世の中を導ける人は、グローバルな視点から世の中を批判できる人材であることが必要であり、その意味で青山学院のグローバル化は生得的なものだと思えます。

**松澤** いろいろと問題は山積していますが、ただ今先生方が話されたように前向きに捉えてやっていかなくてはいけないと思えます。主に大学の教員のグローバル化、国際交流に対して積極的な姿勢になるための意識改革、これは「言うは易し、たいへん難しいですね。自分の与えられた仕事だけをやって、自分のテリトリーを守ってあげればいいたろうというものはありません。これは、大学の先生方だけに求めるのではなく法人もそうです。

5〜6年前にサウジアラビアが費用を出して、2万人とか3万人の留学生を海外に出し、日本にはその1割の2,000人か3,000人に来てもらうという計画がありました。日本には1割の200人しか来なかったんです。それほど日本全体が遅れていたわけですが、本学の受け入れはゼロでした。今度また、サウジアラビアは1万人の留学生のうち、その1割か2割を日本に出すといっていますが、本学はその対応ができていないのです。ぜひ、危機感を持つてほしいですね。

**杉村** 5月に相模原キャンパスで、モンゴルのジクジツド大使に講演をお願いしました。

学生は熱心に聴いていて、質問の時間が足りないほどでした。やはり、普段接することのない立場の人のお話を実際に聞いて、質疑のやりとりをすることは、非常に刺激になっていると思えます。もっと頻繁にやるべきだと思えますね。

**松澤** まさにその通りですね。

**岩田** 現実的なことですが、結局単位をもらえないと学生は聞きに来ないというか、聞きにくいという意識が湧かないようなのです。WTO研究センターでは、青

山スタンダード科目として講座を設けて単位が取れるようにしたので、そこは一応クリアしています。松澤 これからは、例えば「大使シリーズ」の講演などは、出席扱いにする方向で検討してほしいですね。

## 人的ネットワークの拡大

杉村 留学生を増やしましょうと



台湾サテライトオフィス入口



淡江大学台北キャンパス

いうことになる、宿舎、奨学金制度や日本語教育センターが必要といった要望が生じてくるので、どうしてもお金がかかります。当然、新たに生まれるお金はそう多くないわけですから、その点は、大学と法人が一緒になって考えていかなければならないと思います。

松澤 そして、グローバル化は広報部が一体となつて、学内外にアピールすることが大事です。総合的にやっていく必要があると思いますね。

杉村 先生方のこれまでの海外での経験が青山学院のグローバル化にどんな形で活かせるのか、あるいは国際交流センターの所長・副所長という立場にどのように活かしているかと考えていますか。

岩田 私は15回ほどモンゴルを訪れています。モンゴルは親日的で、かなりの日本人がそのことを知っているという事実があります。青山学院としてはたいへん心強い隣国になると思います。他の国と同じような見方をせずに、やや立ち入った関係の構築を検討いただく価値はあると思います。

杉村 その通りだと思います。

政治的にも経済的にも極めて重要な国だと認識しています。希少金属など鉱物資源も豊富な国ですし、本来は日本が国としてもっと接点を持ってこなければいけないかと思っていますね。

岩田 リエゾンオフィスを設けるという提案が大学から出ましたが、当初は文書だけの連絡で、返事がなかったんです。それで私がモンゴルの国際交流センター所長に直にお会いして、「国際交流センターの中にスペースを設けていただけませんか」とお願いしたところ、「喜んでお引き受けします」とおっしゃっていただきました。やはり、実際に行かないといけないというのは、痛切に感じますね。

それからもう一つは、昨年5月にモンゴル教育経済事情等調査団でFECとご一緒させていただいたときに、校友で留学生のルタ君と出会いました。ルタ君は現地で企業を経営しています。日本に帰ってからは、メールでリエゾンオフィス開設について具体的に打診したところ、「自分のオフィスを使ってください。校友として喜んで協力します」と快諾してくれました。このようにモンゴルと青山学院は、人間的な関係でつながっています。

ます。これを絶やさないようにモンゴルを訪問して、さらに人脈を広げる必要があると思っています。杉村 ルタ君が所属している、モンゴルの日本への留学経験者の組織に、もっと青山学院への親近感を持つてもらいたいですね。さらに、モンゴル訪問のときにお会いした放送局の編成局長や新モンゴル高校の校長先生の方々のネットワークももっと構築していければと思います。

松澤 それはいいですね。若い層の方々のネットワーク作りにも尽力したいですね。

岩田 モンゴルの皆さんは非常にグローバルな考え方を持っています。世界的な視野に立って、日本だけを見ているのではないということです。教育レベルもそうですが、教育水準も常にグローバルな視点で行っています。

井田 ベトナムとはITに関してお付き合いが始まりました。文化について、それから戦前をはさんで米国との関係がどうだったかというのには気になります。英文の文献を取り寄せて勉強してみると、非常に入り組んでいて興味深いものがありました。

我々ができることは、大学人と

して貢献することだと思っています。建学の精神のもとで、青山学院の存在とグローバル化はどういう位置にあるのかということ意識していいんじゃないかなと思います。私は国際メソジスト関係学校協議会（IAMSCU）の常任執行委員会の委員として、教育機関の活動に参加しているの、より一層感じることです。

とりわけ、国際的な活躍をしている人は、校友にもたくさんいます。具体的な個別の活動があつて青山学院の厚みが出てきていると思います。青山学院として持っている基盤をどのように活かしているのか、21世紀の我々の課題だと思っています。

**増永** 私は日本データベース学会の会長として、中国や韓国とは人的交流を主とした国際交流を積極的に行っています。そのときに強く感じるのですが、現在、国内で青山学院大学という名前を知らない人はいないのではないかと、思うほど本学の知名度は高いと思います。しかし、一步国外に出ると、それは北米や欧州はもとより、アジアでもその名前を知っている人は非常に少ないように感じています。このグローバル化の世

の中で、日本に青山学院大学あり、ということをとどのようにして知らしめて行くかが今後の最大の課題の一つだと考えています。

そのためには、本学の立ち位置を明確にしないといけない。換言すれば、本学は世界に向けて「何が売り（セールスポイント）なのか」それをはっきりしていかなければならない。キリスト教に基づく建学の精神にのっとり、教育を売ること、研究を売ること、あるいは手厚い学生の面倒みを売ること。グローバル化に向けて青山学院の意識合わせが不可避だと感じています。

**杉村** 今後の青山学院のグローバル化についての抱負と展望をまとめていただければと思います。

**岩田** いくつか強調されたキーワードをつなげ合わせますと、まずは、大学の理念に基づいて、グローバル化は不可欠だということをどうやって教職員の方々に知っていただくかということが重要だと思います。

さらに、ベトナムもモンゴルも政府が盛んにグローバル化をいうわけですよ。それは国家の競争力を強めたいという方針だからだと思います。私たちが住んでいる日本は、途上国ではありません

が、先進国としては、人間個人の競争力を強化するためには、グローバル化は避けて通れないということだと思います。確かに井田先生がおっしゃったように、卒業した後のOB・OGが結果的に国際的な活動をしていることが大学のイメージを高めているわけですが、それは青山学院の理念や校風が背中にあるからだと思っています。それをPRすることは決して悪いことではないと思います。卒業生で活躍されている方に協力してもらって、好循環にまわしていく必要があります。

また、グローバル化にはコストがどうしてもかかります。コストをどこに求めるか。校友会には、青山学院を卒業した後も母校の発展を願っていらつしやる卒業生が少なくないはずですよ。

青山学院の理念に基づけばグローバル化はどうしても必要だから、ぜひともその趣旨で寄付をお願いしたいということをアピールすることも大事だと思います。他大学ですでにそういう趣旨での寄付を募っているところもあるようです。

最後に、大学のグローバル化というのは、教育にも研究にも関わ

りますが、どちらかといえば私たち一般の教員には未知の分野の仕事です。

本学の現状では、教授会など、いくつもの手続きを踏みながら、その都度に出席者全員のコンセンサスを得ながら進めて行かねばならないシステムになっている以上、どうしても意思決定が遅れてしまします。ですから、もし現状ではどうしても進展しないということで、スピードや効率化を優先せざるを得ないなら、グローバル化の権限を今までと異なる独立したセクションに委譲したほうがやりやすいということもあるかもしれません。

**松澤** 本日は先生方の非常に有益なお話を聞きました。これまでの伝統的なやり方やシステムを見直す必要があるかもしれません。教職員の皆さんと一体になって努力したいと思います。今後もコミュニケーションをしっかりとっていきければ、充分に改善していかれると思っています。

これからも青山学院が一体となってスピード感を持ってグローバル化に取り組んでいきたいと思います。

（5月17日 院長室にて）

文 本部長部